

<緊急報告>

アンコール・ワット付近から大量の廃仏発見（抜粋）

— 約 800 年前の歴史を物語る発掘 —

上智大学アンコール遺跡国際調査団
上智大学アジア文化研究所

団長：石澤良昭(上智大学教授)

I 歴史を塗り替える大発見

1 アンコール文明は一日にして成らず

アンコールとは「都城」を意味するサンスクリット語「ナガラ」がクメール語のなかで訛^{なま}ってできた名称である。シェムリアップ地方に在るカンボジアでもっとも有名な遺跡アンコール・ワットは「寺院になった都市」、そしてアンコール・トムは「大きな都城」という意味をもっている。こうした呼び名は、首都プノンペンの南に位置する「アンコール・ボレイ」のように、現代でもカンボジアの地名とくっついて合成語の形で使われている。

アンコール(クメール)文明とは9世紀から15世紀にかけての石造大伽藍^{がらん}¹を含む多くの寺院が建設され続けた時代をさす。しかしながら19世紀半ばに来航した西欧人たちが現地で見えたアンコール文明の実像は、石材が崩れ落ちた遺跡群のみが目前に広がり、それに併せて周辺の高床家屋に住む貧しい農民たちの姿であった。それは左右対称の壮大な大伽藍と豪華絢爛^{ごうかけんらん}な彫刻とはあまりにもかけ離れた実像であった。

1860年にアンリ・ムオが煌びやかであったと思われるアンコール文明の廃境跡を再発見して当時の西欧世界へ紹介したが、それが謎に満ちた失われた文明として人々の興味をそそいたのであった。このアンコール文明については記録や史料が少なく、そ

¹僧侶たちが住んで仏道を修行する、清浄閑静な所。後に寺院の建築物の称。(広辞苑)

の後 20 年あまりはこのアンコール遺跡がどんな歴史を持った人たちの歴史遺産であるのか分からなかった。1873 年に L. ドラポルトが遺跡調査隊を組織し、カンボジア各地の調査を実施した。同行した医師 F. J. アルマンは現地で採取した碑刻文^{ひこくぶん}写本を収集品の一つとして雑誌に掲載した。それがライデン大学の H. ケルン教授の目にとまり、解読された。それは 1879 年のことであった。サンスクリット碑文の断片が解読されて、王の名前が判明した。このように、アンコール遺跡がいかなる内実の文明であったかを解明するきっかけをつくったのは碑刻文であった。

アンコールは、ローマ同様一日にして成ったのではない。東京都区内ほどの広さの約 300 万 m² に展開するアンコール遺跡群は、8 世紀のアクヨム寺院から 14 世紀のマンガラールタ寺院(1309 年)までを含む大小 99 ヶ所の遺構^{いこう}²がユネスコの世界遺産に登録されている。それぞれの石造伽藍や祠堂^{しどう}³はその時代の王の権力の象徴であり、同時にそこには当時の時代精神が塗り込められていたといえよう。それぞれの王は前任者王の都城・王宮・寺院を再使用することをせず、篤信^{とくしん}⁴する神々のために競うように大きな寺院を建立した。そして 16 世紀に再度戻ってきたアンコールの王たちがアンコール・ワットの完成に向けて仕事を継続した。

現在の観光客はこのように約 600 年から 800 年の歴史が詰め込まれた遺跡群を一堂に会し、疑問と質問を発しながら驚き、まごつき、往時の繁栄を偲ぶのである。

2 103 体の廃仏を発掘 — 2001 年 3 月の快挙 —

私たち上智大学のアンコール遺跡国際調査団は、国交のない時から 22 年にわたって、時のカンボジア政府と協力してアンコール遺跡の保存・修復・調査研究活動を行ってきた。1996 年には、カンボジア人中堅幹部を養成するために現地に上智大学アンコール研修所を建設した。

1992 年からはアンコール・ワットから東北へ約 6km のところにある 12 世紀末頃建

²古い建築物の残存するもの。(広辞苑)

³(家の中の)祖先の霊をまつる所。寺院で、俗家の位牌をまとめて安置する位牌堂。持仏堂。神仏をまつる小さい建物。ほこら。(広辞苑)

⁴あつく信ずること。(広辞苑)

立の仏教寺院バンテアイ・クデイ遺跡が研修場所として選ばれ、広い境内において通常の発掘と修復の研修が、ここ 10 年間こわたり続いてきた。そして 2001 年 3 月、偶然にもこの境内から 103 体の廃仏が発掘された。ちょうど通常の考古研修を実施している最中であった。日本では考古発掘の場合、あらかじめここに何かありそうだというあたりをつけて発掘することがあるが、今回は偶然の一致であった。それは私たちにとって発掘の実習を始めて 10 年目の快挙でもあった。そこは同遺跡の東参道の入口から 30m も進んだところで、十字型テラスの手前にある北側小祠堂前から発掘された。仏像の大きさは大きいものでほぼ 1.8m ぐらい、小さいもので 20cm ぐらいまで、大中小があった。青銅製の小仏 2 体も見つかった。

発掘状況から考察すると、深さが約 2.5m、底面一辺が約 2m の四角の穴が掘られ、底面の方に小仏や頭部など小仏が埋められていた。上の方に胴体など大型石片が投げ込まれ、そして土をかけながら突き固められたことが判明している。これらの廃仏は埋められる以前に頭部と胴体が切断されたらしく、同一固体に復元できるものは多くない。これら廃仏は約 800 年の歳月にわたり温度も湿度も一定であったため、保存状況は極めて良く、高貴で美しい尊顔を拝むことができる。これらの仏像の時代は 11 世紀から 13 世紀前半であり、その尊顔や身体装飾には 11 世紀のバプーオン様式やアンコール・ワット様式を一部含みながら大部分が 13 世紀のバイヨン美術様式に属し、三重のナーガ(蛇神)の胴体上に鎮座した典型的な仏像であり、ナーガが 7 つ頭を大きく広げて仏陀を守っている。

3 千体仏石柱と 171 体の廃仏発掘 — カンポジア人研修生頑張る —

さらに今回 2001 年 8 月 15 日からの調査では、前回の 103 体の廃仏発掘現場に隣接した場所から、同じ廃仏 171 体が見つかり、座仏が四面に多数刻まれた 3 つの石柱も発見された。石柱は砂岩で高さ約 1.2m、横幅 45cm。一面あたり座仏が横に 12 列・縦に 21 列、計 1008 体が菩薩の集合図曼陀羅⁵のように並んでいる。この座仏の一つの大きさは 2.5cm である。

⁵ 梵語。輪円具足・道場・壇・本質などと訳す。諸尊の悟りの世界を象徴するものとして、一定の方式に基づいて、諸仏・菩薩および神々を網羅して描いた図。四種曼荼羅・両界曼荼羅など多くの種類がある。もともと密教のものであるが、浄土曼荼羅や垂迹曼荼羅、日蓮宗の十界曼荼羅のように、他にも転用される。(広辞苑)

石柱に刻まれた千体仏⁶についてはインドのアジャンタ石窟寺院⁷の第 7 窟(5 世紀)に見られ、敦煌の千仏洞(4~10 世紀頃)にもある。日本では唐招提寺(759 年創建)の盧遮那仏⁸光背⁹に千体仏が描かれている。

カンボジアでは千体仏石柱の発見は初めてであり、密教がかった往時の仏教の輪郭が少し判明してくる。碑文¹⁰では密教系のタントラ教¹¹の経典が存在したことを伝えている。その点から推察すると千体の仏像を曼陀羅状に刻み、拜むことでを功德を積んでいたのかもしれない。美術史・図像から考察すると、12 世紀第 3 四半期のヴィシュヌ神四面浮彫りの石柱(12 世紀第 3 四半期)が類例としてある。この石柱には 15 段×17 段、四面で 1020 体の小ヴィシュヌ神像が彫られ、千体仏石柱と同じ様式である。ヒンドゥー教系の美術様式からも影響を受けていたと思われる。またコンポン・スヴァイのプリア・カーン寺院で発見されたローケーシュヴァラ(観世音菩薩¹²)彫像にも、その頭部から上半身にかけて千体仏に似た小仏が刻み込まれており、千体仏石柱と同様の宗教的な意味を持つものであった。

これまでにアンコール遺跡群の調査・研究・保存修復活動は、1860 年のアンリ・ムオのアンコール遺跡紹介から始まり、旧フランス領インドシナであったのでフランス極東学院が独占的に行なってきた。しかしながら、ここアンリ・ムオから 140 年あまり経過するが、今回のように千体仏の石柱および 274 体もの大量の廃仏が発見された例がない。その意味で大発見といえるだろう。しかし、13 世紀の後半に廃仏の事件の背景を示唆した論文が、1999 年にフランス人アンコール研究者クロード・ジャツク

⁶同一の面に多数の同形の仏像を彫刻し、または描いたもの。洞窟の壁面または光背などに作られる。彫像を多数一堂内に安置した場合もある。千仏。(広辞苑)

⁷岩壁にほらあなを掘り、内部に仏像を安置したり彫刻したりして寺院とした所。インドのアジャンタ、中国の敦煌(トコ)・雲崗(ウコ)・竜門などが有名。(大辞林)

⁸毘盧遮那仏(ヒルヤブツ)の略。華嚴経などの教主で、万物を照らす宇宙的存在としての仏。密教では大日如来と同じ。「毘盧遮那」は新訳華嚴経で、「盧舎那仏」は旧訳華嚴経で用いられる。遮那。舎那。遍照。(広辞苑)

⁹仏像の背後についている、仏身から放射される光明を象徴的に表す装飾。頭部のものを頭光(ゴコ)、身体部分のものを身光、両者をともに持っているものを挙身(コソ)光という。後光(ゴコ)。御光(ゴコ)。(大辞林)

¹⁰石碑に彫る文章。碑に彫った文。ひもん。(広辞苑)

¹¹①ヒンドゥー教のシヴァ神のシャクティ(性力)を崇拜するシャークタ派の文献の通称。②インドの後期密教の聖典。また、インド密教を総称してタントラ仏教という。(広辞苑)

¹²観音経(カノキヨ)などで説かれる菩薩。この名称は鳩摩羅什(カマロシ)の旧訳で、玄奘(ゲンソウ)の新訳では観自在菩薩。衆生(シヨウジヨウ)の声を聞き、その求めに応じて救いの手をさしのべる慈悲深い菩薩として多くの信仰を集めた。勢至菩薩とともに阿弥陀(アミダ)仏の脇侍。その住所は補陀落(フダラク)とされ、日本では那智山であるとする。慈悲の無限なことに応じた多様な姿で説かれる。(大辞林)

(Clauae Jaques)教授から提起されていた。これは大量の廃仏発掘を予見した論文ではないが、その示唆は興味深い(Jaques, Cl. : *Les Dernies siecles d'Angkor, Comptes Renduss des Seances de l'Annee 1999(Jan. -Mar.)*, Academie des Inscriptions & Belles-Lettres, Paris.)。

こうした大量の廃仏発見から言えることは、他の同時代の仏教系遺跡であるプリア・カーン、タプロームなどにも、廃仏が地中に埋められている可能性が高い。今回の発掘はアンコール王朝末期の歴史を塗りかえるほどの大発見といえよう。そしてこの廃仏をめぐって歴史・考古・美術・図像の諸学から新しい議論が提起されてくるだろう。廃仏発掘を手がかりに往時のアンコール時代末期の社会と文化を解明していきたいと思う。

II アンコール時代末期の宗教改革

1 アンコール時代の王は神・仏の化身

アンコールの王たちの出身地は、多くの場合地方であり、そこから攻め登って即位することが多い。初代のジャヤヴァルマン2世(802・834年)の場合も、ジャワ方面から帰国し、わかっているだけで4ヶ所点々と掃討のため渡り歩き、その後アンコール地方に拠点进行を定め、さらに各地へ征討に出かけていた。碑文からは王の後妃9名の出身地がどうも掃討地であった可能性が高いことが判明している。そして現在のプノン・クレン丘陵上の寺院において^{てんりんじょうおう}転輪聖王(正義をもって世界を治める王)として即位した。さらに「土着の守護精霊の王の中の王」を創設して王の位格を神聖なものとして増幅させた。これをサンスクリット語では「デヴァラージャ(devaraja=神々の王)」と載せている。こうした土着の精霊信仰をヒンドゥー教的な装いを借りてすることで、王権の神秘性を演出したものであろう。

もっと一般的な言い方をすれば、王は当時から神の化身と考えられ、地上と天空をつなぐ仲介者であり、地上における神として^{あが}崇められてきた。王の神聖さは碑文で万能の守護者もしくはシヴァ神、ヴィシュヌ神の化身(同一視)と言及されている。そして王は神秘的なデヴァラージャ儀式執行および王の^{しごう}諡号¹³を創設して、その神的な位格と精神的な優位性を裏付けている。

カンボジアにおける宗教は祭政一致的傾向を持っているとはいえ、次の3つの特徴がある。第一に、村人たちは精霊信仰・祖先崇拜・地方の守護神・地霊などの信仰を持っていたが、その神概念の間口が広く、インドから到来した神々が近似していたのでその途中で融合してしまい、異教の神々であることすら忘れ気づかないことがあったようである。長い年月をかけてヒンドゥー教の神々や仏陀までが何の違和感もなく土着の神々と同じ場所において崇められてきた。

第二に、東南アジアのインド化された地域ではヒンドゥー教の神と王の名前を組み

¹³生前の行いを尊び死後に贈られる称号。おくりな。(広辞苑)

合わせた神像を礼拝していた。アンコール王朝では王個人の名前と神の名前を併せて冠称した特別のリング(男根)や神像が礼拝されていた。ということはアンコール時代のカンボジアにおけるシヴァ派は必ずしもインドにおけるシヴァ派と同じではなく、サンスクリット語を使用しているとはいえカンボジアの土着の守護精霊を巻き込んだシヴァ派であった。仏教も同じであった。しかしながら、これらシヴァ派やヴィシュヌ派は王の帰依^{きえ}¹⁴を得て巨大寺院や大都城を造り続けてきた。ジャヤヴァルマン 2 世即位の 802 年以來、土着の神々を巻き込みながらも立国の思想的基盤は大きくいえばヒンドゥー教であった。

第三に、アンコール王朝はシヴァ派とヴィシュヌ派が仏教と平和裡に共存し、一部では混淆^{こんこう}¹⁵的な箇所もあるが相互に寛容をもって認め合ってきたという。その延長線上に考えていくと、今回の廃仏はなぜ起こったのかという疑問が出てくる。

2 ジャヤヴァルマン 7 世(1181-1219 頃)の宗教改革 — 仏教を国教に —

ジャヤヴァルマン 7 世は、アンコール王朝の中で最も多くの寺院を建設し、隣国との戦争に勝ち版図を拡大した王である。空前のアンコール王朝の栄華をつくり出した偉大な王でもある。ちょうど日本の鎌倉時代の王にあたるが、その在位は 40 年間にわたり、その間は仏教優先策をとっていた。

12 世紀前半までのアンコール王朝約 400 年の立国の思想はシヴァ派とヴィシュヌ派であった。それを証左するように、都城の中やその近隣を含めヒンドゥー教系の寺院が数多く建立されてきた。仏教も少数派ながら存続していた。そのヒンドゥー教で固められたアンコールの地において仏教寺院の建設および仏教の聖地への衣替は、実際にはジャヤヴァルマン 7 世が強権を発動して推進した一種の宗教改革でもあったと思われる。

王は従来からのしきたりを尊重し、信仰の主流であったヒンドゥー教のシヴァ派・

¹⁴神仏や高僧などのすぐれた者を信じ、それによりすがること。(大辞林)

¹⁵様々なものが入りまじること。区別すべきものを一つにすること。混交とも書く。(大辞林)

ヴィシュヌ派を一部仏教寺院内に取り込み、^{こんこう}混淆しながら大寺院をいくつも建立してきた。そこでは大々的に祭祀が執り行なわれていた。例えば彼の建立したプリア・カン寺院の配置を見ると、中央にローケーシュヴァラ(観世音菩薩)を安置し、北にシヴァ神、西にヴィシュヌ神、南には祖先の^{まつ}霊を祀っていた。しかし、その内実は仏教を国教的に扱い、ヒンドゥー教を仏教の下位においている構造であった。仏教寺院内外にヒンドゥー教の神々を併神するように配慮はしていたが、しかし、これは一種の宗教改革であった。王は国内各地に大きな仏教寺院をいくつも建設し、建寺王といわれるほど権勢を振るった。

ジャヤヴァルマン7世治下において人気のあった仏像は、先に述べたローケーシュヴァラ(観世音菩薩)像であった。像容は4本手を持った形をとり、たくさんつくられ、多くの寺院内に安置されていた。このローケーシュヴァラは、菩薩(悟りを求める Bodhisattava)であり、^{あみだによらい}アミターバ(阿弥陀如来¹⁶)の弟子で、師を化仏¹⁷として頭髪の中に掲げている。この菩薩は人々を守り、その病^{やまい}をし、全ての衆生^{しゅじょう}¹⁸に救いの手を差し伸べてくれる救世主であると考えられていた。当時のジャヤヴァルマン7世はどうもこの菩薩の仏教的諸行を自分の鑑^{かがみ}にしようと考えていた。

そうした改革を促す仏教的思想を背景として、美術的にも彫像はその法衣を脱ぎ捨て、神秘的な微笑を伴った明るい尊顔の傾向を見せてくる。そして内面的な精神生活が全身からにじみ出てくるような造像法となった。彫像の重点が尊顔の表情や手の印相^{いんそう}¹⁹に置かれるようになった。さらに人物描写に逼真性を求めようとした新しい美術傾向も示している。そして像容の中に現存する王族の実姿を借用していく傾向を見せている。こうした意図は、図像の部位の解剖的な人間実像を探求し、最も美しい造形作品を創り出したのである。

この逼真性はこれまで長い間にわたり彫工たちが軽んじてきたものでもあった。

¹⁶阿弥陀の尊号。西方にある極楽世界を主宰するという仏。法蔵菩薩として修行していた過去久遠の昔、衆生救済のため四十八願を発し、成就して阿弥陀仏となったという。第十八願は、念仏を修する衆生は極楽浄土に往生できると説く。東アジアの浄土教諸派(わが国では浄土宗・浄土真宗など)の本尊。阿弥陀仏。阿弥陀如来。略して弥陀。無量寿(仏)。無量光(仏)。(広辞苑)

¹⁷仮の姿をとって現れた仏。化身(けしん)。(広辞苑)

¹⁸いのちあるもの。生きとし生けるもの。一切の人類や動物。(広辞苑)

¹⁹仏・菩薩が手に結ぶ印(いん)の形。(広辞苑)

3 ナーガ(蛇神)上に鎮座する仏像

上智大学アンコール遺跡国際調査団が発掘した 274 体の仏像は、ほとんどがナーガ(蛇神)に護られて禅定²⁰する仏陀であり、この様式の仏像が往時流行していたようである。これらの彫像はクメール美術では特に馴染みが深く、仏陀が涅槃²¹の境地に入るための 7 週間にわたる禅定の中に、滝のような雨が 1 週間降り続いたことがあったという。その時、龍王ムチリンダが地の中から現われ、とぐろを巻き 7 つの頭を大きく広げて仏陀を守ったという。

このナーガ上の座仏は、最初は 10 世紀半ば頃に登場してきたが、当時のヒンドゥー教神像から図像的な影響を受けていたようである。そうした図像の混淆的傾向は仏陀の髪型からも説明をすることができる。その髪型は伝統的な螺髪²²の髪容に代えて丁寧に編まれた細い毛で一つにまとめられ、本物のマクタ(頂髻)のように円錐形の髻覆いをつけ、ウスニーシャ(肉髻)を包み隠している。発掘された廃仏の中にはアンコール・ワット時代の様式を髪型に類似したものがあり、影響を受けていたのであろう。

また、多くの仏像の繊細な顔貌および優美な泉梁はあまり馴染みがないが、しかし、あごのところの中央部の凹みは親近感を感じさせる。この尊像の像容は、とても控えめな肉づきにもかかわらず、見事な迫真性を持っている。また仏像の中には王冠とマクタ(頂髻)が描かれている。今回、地中から出土した座仏像の中には身莊嚴の装飾で盛装したナーガ座仏があり、当時を彷彿させるものがある。

その当時の仏教の教理(理想)というのは、生きとし生ける者がはかなくむなしいもの(五欲)に対して打ち勝つということである。そこには「ボディ(菩提・道)」があり、正覚²³を得ることができるのである。そして「滅びることのない王権」を掲げながら究極の勝利(解脱²⁴)へ向かうという。ついに永遠の安らぎを求めた境地に達するのである。これが修行に対する勝利(涅槃)へとつながっていくのである。

²⁰心を静めて一つの対象に集中する宗教的な瞑想。また、その心の状態。(広辞苑)

²¹煩悩(ぼんのう)を断じて絶対自由となった状態。仏教における理想の境地。悟り。(広辞苑)

²²縮れて右に渦巻く巻貝の形をした頭髪。仏像に特有の形式として表示される。らはつ。(大辞林)

²³正しい悟り。真理を体得した仏の悟り。(広辞苑)

²⁴束縛から離脱して自由になること。現世の苦悩から解放されて絶対自由の境地に達すること。(広辞苑)

発掘された数点のアンコール・ワット様式の仏像に限っていえることは、宗教的伝統主義にのっとり、像容は簡素化されているが、細部にわたり装飾や身荘厳が描かれ、その顔貌は、晴れやかではあるが、その内面の精神生活を映し出してはいない座仏もある。こうした廃仏には優美さや穏やかさというものが感じられない。この王冠型髪飾りと「マクタ(頂髻)」というのは、もともと王族の飾りものにすぎなかった。類似した髪容はアンコール・ワット寺院の回廊薄肉浮彫りの中に描かれており、スールヤヴァルマン2世のかぶり物やヴィシュヌ神の図像も同じである。そうした宗教的伝統主義は彫像制作の美意識の中で、そのエネルギーが形式化し、活力を失い技巧主義に走ってしまう危険性をはらんでいたのである。

4 パイヨン寺院に残る廃仏のあと — 仏像狩り —

なぜこうした仏像は廃仏の危機に見舞われたのか。仮説の域を出ないが、第一の理由はジャヤヴァルマン7世の逝去後(1219年頃)の政治事情のからんだ宗教問題が起きたからである。1220年頃登位したインドラヴァルマン2世(1220年頃～1243年)は断片的な史料や寺院改造跡から、仏教徒もしくは仏教を容認していた王と思われる。したがって仏教が権勢を振るい主導権を握っていた期間は7世王とインドラヴァルマン両王を併せると63年間に及ぶ。

ところがその次に即位したジャヤヴァルマン8世(1243年～1295年)はシヴァ神を篤信とくしんしていたと思われる。その結果、この王の統治下において反仏教運動が起こり、仏像狩りが行なわれたのだろう。しかしながらシヴァ派およびそれに賛同する勢力が、仏教優位の7世王時代も存在し続け、活動していたと思われる。何が反仏教運動のきっかけであったのかははっきりしないが、例えば王位継承などをめぐる権力闘争をきっかけに鎮静化していた63年間の反発がエネルギーとなって、今回の廃仏行為に走ったかもしれない。シヴァ派もしくはヴィシュヌ派の人々が国内の仏教寺院の仏像を打ち壊し、捨てたのではなかろうか。

ジャヤヴァルマン7世の創建のアンコール都城の中心パイヨン寺院が、ヒンドゥー教寺院に改造され、衣替えさせられたのはジャヤヴァルマン8世の時代であった自そ

の証拠を今でもバイヨン寺院内に見ることができる。まず第一に往時中央祠堂²⁵に安置されていた3.6mの大仏座像が破壊され、中央祠堂の地下に埋められた(1935年に中央祠堂地下から発見)。おそらくその時にハリハラ神像と取り換えられたのであろう。また同寺院の柱・壁面の仏像浮彫りが鋭い石のみでえぐり取られ、代わりにヒンドゥー教の苦行僧座像が彫り込まれた。

ところがアンコール研究の泰斗²⁶、G. セデスはジャヤヴァルマン 7 世以後のシヴァ派と仏教の対立に触れ、「寺院の壁画の仏教彫刻を組織的にそぎ落とし、その代わりにリングヤシヴァ派行者^{ぎょうじゃ}の肖像をはめ込んだ程度の抗議活動であった」と述べていた(Coedes, G: *Les Peuples de la Peninsule Indochinoise, Histoire et Civilisations*, Dunod, Paris, 1962, p. 209 (邦訳: 辛島・桜井・内田共訳『インドシナ文明史』第2版, p. 279))。しかし、このセデスの延長線上においてあれほど大量の廃仏をどのように考えるかという疑問が起こってくる。

²⁵ (家の中の)祖先の霊をまつる所。寺院で、俗家の位牌をまとめて安置する位牌堂。(広辞苑)

²⁶ その道で世人から最も仰ぎ尊ばれている権威者。(広辞苑)

III アンコール王朝末期も繁栄を示す

1 ジャヤヴァルマン 8 世の反宗教革命—激しい権力闘争—

ジャヤヴァルマン 8 世は前 2 代王の仏教信奉の残余勢力と戦い、勝利して登位した。王はヒンドゥー教への篤信^{とくしん}が、前 2 代の王に対する敵意と重なって、廃仏処分という一連の過激な行動に出たと思われる。王は強権を発動して前 2 王が建設した寺院の改築、仏像の投げ棄て、碑文の叩き壊しや地中への埋め隠しなどをやってのけたのであろう。そのため前 2 王の碑文もあらかた壊され、棄てられ、埋められたのかもしれない。ジャヤヴァルマン 8 世は前 2 王と仏教を否定し、在位中に徹底的な破壊を命じていた。これまでに仏教を最優先させてきた 63 年間および前 2 王への恨みも重なって激しい敵意となったのかもしれない。その裏にはたぶん王位継承をめぐる激しい権力闘争があったものと思われる。8 世王は当時仏教寺院に何十万と安置されていたであろう仏像をすべて破壊させた。

ジャヤヴァルマン 8 世は、仏教寺院や仏像の破壊を徹底する一方で、まずヒンドゥー教寺院への改造とそれに伴う建築装飾の工事も実施していた。前述の通りバイヨン寺院では鋭利な石のみで仏像浮彫を削り、代わりにヒンドゥー教の苦行僧像を彫り込んでいる。

また、バイヨン寺院は建立初期の十字形テラスを東西に少し増広して長方形に変えてあるが、この一部改造はジャヤヴァルマン 8 世の仕事と推察できる。8 世王は、前 2 王時代からあった四面仏尊顔塔に加えて四面のブラフマー神として同じく新四面塔を建てたかもしれない。ヒンドゥー教はブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの 3 大神を中心に形成され、ブラフマー神は理論的には最高神とされるが、カンボジアではいつもヴィシュヌ、シヴァ両神の陰に隠れ、第二儀的な役割しか与えられていなかった。そのブラフマー神は常に 4 つの頭と 4 本の手で造像されているところから、四面のブラフマー神尊顔塔と解釈していたのかもしれない。

バイヨン寺院第 2 回廊の内側壁面に薄肉浮彫りが刻み込まれたのは、多分このジャヤヴァルマン 8 世治下であろう。その証拠にヒンドゥー教に由来する題材が多く見られ、さら

にこの第2回廊の浮彫りは明らかに第1回廊の浮彫りに見られる美術様式とは異なる様式であり、描出方法や図像が粗雑で急造りであることは、誰が見てもすぐ分かる。そこには例えば、乳海攪拌図、あるいはヒンドゥー教の叙事詩「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」の絵図が彫り込まれたみんなヒンドゥー教に関するものである。

タ・プローム寺院ではまぐさ石のところに、仏像に代えてリング(男根)と台座を彫り込んでいる。

2 アンコール王朝は疲弊するまま衰退説

フランスの東洋学者で古代東南アジア研究の泰斗のジョルジュ・セデス(1886～1969年)は、カンボジア碑文を解読してその古代史・中世史の枠組みを創った大学者である。1964年の著作(Coedes, G.: *Les Etats Hindouses d' Indonchine et d' Indonesie*, Paris, 1964, p.321/322)の中で「ジャヤヴァルマン7世(1181年～1220年頃)の事業は人々にとっては過重な負担であった。彼らはたびたびの戦争とスールヤヴァルマン2世の大寺院建設ですでに疲れきっており、それ以後カンボジアは隣国の攻撃に対して抵抗する力がなくなっていた。」と述べている。

さらにアンコール水利都市論を発表したプノンペン生まれのフランス人第一人者ベルナル・フィリップ・グロリエ(1926～1986年)は、1961年に「少なくともジャヤヴァルマン7世は王朝を決定的に疲弊させ、アンコール朝の黄昏に巨大な影を落とし続けている」。そして「ジャヤヴァルマン7世とバイヨン寺院の後には、アンコール朝において注目される王も寺院ももはや存在しない」と断言している(Groslier, B.Ph.: *Indochine, Carrefour des Arts du Monde*, Paris, 1961, PP.189,191)。そしてバイヨン美術様式は全てジャヤヴァルマン7世の死によって1220年までに終わってしまったという。そしてこの2人のフランス人アンコール研究の碩学は、ジャヤヴァルマン7世によって成し遂げられた数多くの大規模な寺院建設がアンコール帝国を破産させ、王朝を疲弊させ衰退に追い込んだというのである。つまり建寺王朝の崩壊である。

この2人のフランス人碩学^{せきがく}²⁷は、こうしてジャヤヴァルマン7世が約40年もの長きにわたり人々を多くの寺院の建設に動員したので、村人たちは完全に疲弊したという主張である。その主張の根拠は碑文史料が欠落し、その時代を示す考古出土品もなく、諦^{あきら}めに近い結論であった。それと同時にこの2人の第一人者に導かれた完璧な結論は一つの呪縛^{じゅばく}ともなり、多くの学者がこれまで是認してきた。

しかし、その呪縛は今だに続いている。クロード・ジャック氏はセデスの後継者であり、フランス極東学院最後の世代の研究者であるが、1990年の著作の中で「よく分からぬ最後の王たち」を掲げ、ジャヤヴァルマン8世のシヴァ派回帰を指摘しているが、論調はセデスとグロリエ^{とうしゅう}を踏襲した内容であった(Jaques, Clauae: Angkor, Bordas, Paris, 1990, pp. 162-163)。

3 インドラヴァルマン2世とジャヤヴァルマン8世の活躍ぶり再評価

今回見つかった274体の大量の廃仏行為は、インドラヴァルマン2世とジャヤヴァルマン8世の時代が、これまでのアンコール王朝末期や建寺疲労による衰退の時代であるという通説を覆すことになるだろう。この8世の王命が行き届き、通常^{とくじょう}の政治が執り行なわれていたということになる。ジャヤヴァルマン7世後の2人の後継王は行動的であり、実力派であったことがわかる。

13世紀末のカンボジアは海外の商人たちに「富貴真臈」(『明史』真騰伝掲載)と称された。この評判は、アンコール都城^{けんらんごうか}の絢爛豪華な寺院や城郭の様子を風聞した人たちが伝えたものであろう。1296年に中国人、周達観が来訪したアンコール都城ではいつも通り政治が執り行なわれていたと伝えている。その記載の様子から、外観的にはジャヤヴァルマン・世時代とそう変わらないほど物資が流通し、平和な日常生活、いつも通りの政治と儀礼が執り行なわれていた。この周達観の報告ではシャム勢力の伸張に困却していると伝えているが、この王朝が衰退しつつある過程にあるという記載は全く見られない。周達観は特派員的な眼で華麗な大王宮の様子を伝えている。そして日常生活の見聞を25項目に分けて挙げ、その活況を見せている王都の様子を伝えている。確かに13世紀末頃はカンボジアの外領であったチャオプラヤ川方面や東北タイにおいてシャム(タイ)人が勢力を伸

²⁷ 学問のひろく深い人。大学者。(広辞苑)

張させ、クメール人太守の軍隊と戦闘力拮なわれ・太守が追い払われたと思われる。周達観はその攻防については言及している。

史実上からジャヤヴァルマン・世時代には現在のタイ中部のスコタイ地方にまで領域を拡大していたが、シャム(タイ)勢力の興起と伸張に対して撤退せざるを得なかった。しかし、7 世王逝去と同時にタイ人土侯が反乱を起こし、スコタイの興起となった。スコタイより北方の王国チェンマイはマンライ王により 1296 年に建国された。

アンコールの王たちはそれまでの慣例として新都城、新山岳寺院、新王宮の 3 点セットを建立することが王たる者の義務であった。前王のものを使わないしきたりがあった。しかし、内外の雲行きが怪しい政治情勢の中で、ジャヤヴァルマン 8 世は新寺院を建立する余裕がなかったそれにもかかわらずシヴァ派の祭儀を型通りに執り行なうため、旧来の仏教寺院を改造し使用することになったようである。従って王はバイヨン寺院の中央祠堂しどうを改造し、仏陀像の代わりにハリハラ神(シヴァ・ヴィシュヌ両神)まつを祀ったのである。その意味ではアンコール・ワットを建立したスールヤヴァルマン 2 世とジャヤヴァルマン 7 世の両統治のような大繁栄ではなかったかもしれないが、それなりの隆盛が持続していたと思われる。

4 これまでの通説を覆す新発見？

1295 年にジャヤヴァルマン 8 世を退位させ、力づくで即位したのはシュリンドラヴァルマン王であった。同王はジャヤヴァルマン 8 世の娘婿で、上座仏教^{じょうざぶつきょう}²⁸を初めて公認した王でもあった。

アンコール・トム都城内では現在 60 ヶ所以上に敷石をした「テラス」が発見されてい

²⁸ 釈迦の死後 100 年くらいの頃、仏教教団は上座部と大衆部という保守・革新の二派に分裂した。その後分裂は続いて、やがて小乗 20 部と数えられるほどになる。これを部派仏教という。これに対し、教団分裂以前を原始仏教という。原始仏教は比較的忠実に釈迦の言行を伝えていると考えられるのに対して、部派仏教ではそれぞれの立場からの解釈が展開される。さらに紀元前後の頃に、大衆部の系統からいわゆる大乘仏教が成立してきた。その特色は、空(くう)の立場から縁起説を解釈したこと、自己ひとりの完成のみならず、一切衆生の救済を念願する菩薩の道を説いたことにある。この立場の人たちは、自分たちの行き方が理想に至るためのすぐれた大きい乗りものだという意味で大乘と自称し、それまでの流れを小乗だと決めつけた。北方の中国、日本に入ってきたのはほとんどすべて大乘の系統であり、スリランカ、ビルマ、タイなどに伝わった戒律の厳しい南方仏教はいわゆる小乗の系統である。ただし今日では、世界仏教徒会議の決議に従って、小乗という語は使わないで上座部仏教とよぶことになっている。(現代用語の基礎知識)

る。これらは上座仏教小寺の基礎土台であったし、しばしばアンコール時代の石材を再使用して造作されていたものである。これらの仏教テラスは、早ければシュリンドラヴァルマン王以降からアンコール都城内をかなり長期間にわたり占拠していたと思われる。この史実が正しいとするならば、これら上座仏教の信徒たちは昔のアンコール・トム都城へ戻ってきていたのであった。家族たちはテラスと上座仏教小寺の近隣に住み、旧都城内を自由に使っていたように思われる。タ・フローム入口の「小牌文」は、明らかに 14 世紀初頭のものである。同じくプリア・カン寺院の中央しどろ嗣堂のローケーシュヴァラ像に取って代わって持ち込まれた上座仏教の仏塔は、この時代に建立されたものであろう。

これまでアンコール王朝の通説では、ジャヤヴァルマン 7 世の 40 年間にわたる寺院建築のせいで国が衰退し、15 世紀になってアユタヤに滅ぼされたといわれてきた。しかし、今回の大量の廃仏の発見で、ジャヤヴァルマン 8 世の統治下でもそれなりに通常の政治が機能し、国内の繁栄が維持されていたことが明らかになってきた。1296 年にカンボジアを訪問した中国人周達観による『真騰風土記』の記述もそれを裏付ける。アンコール王朝末期の歴史を塗り替える新しい議論が始まろうとしている。

IV なぜ日本がカンボジア人中堅幹部養成プロジェクトをやっているか — 10 年前から発掘を続けている現場実習 —

アンコール遺跡群は 1992 年に世界遺産(文化遺産)に登録された。カンボジア人の精神的な象徴としてのアンコール・ワットの世界遺産登録は何よりの快挙であった。しかし、今なおこの遺跡群は倒壊の危機にさらされている 27 件の世界遺産リストの中の 1 つに挙げられている。

カンボジアは 1970 年から内戦が始まり、ポルポト政権による虐殺、ヘンサムリン政権下ではベトナム軍進駐と内戦があったが、その後 87 年からはじまった内戦終結に向けての協議、91 年のパリ和平協定と国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)の成立、93 年の総選挙と王制復活など、和平に向けてのスケジュールがこなされてきた。そうした中で、98 年の総選挙によりフンセン内閣が成立し、順調な復興が進んでいる。平和となり 2000 年 1 月には故小渕首相、2001 年 6 月には秋篠宮同妃両殿下のカンボジア公式訪問があった。

登録された遺跡群は東京都区内ほどの広さであり、そこに 62 ヶ所の石造りの構築物がある。それらは寺院、僧院、橋、貯水池、堤防、都城などであり、その伽藍の規模の大きさ、浮彫りや彫像の美しさ、発想豊かな宇宙観などから往時の人々が考える神の世界が明示され、同時にそれを実現した往時の社会・技術・思想があり、その繁栄ぶりがしのばれる。

ここ数年多くの観光客が来訪し、アンコール・ワット西参道は銀座通り並みの混雑ぶりである。日本人観光客の中には遺跡はアンコール・ワット 1 ヶ所だけであると思って来た人がいて、アンコール・トム、その他多数の大遺跡を訪ねアンコール大文明にびっくりする人が多い。

私たち上智大学アンコール遺跡国際調査団は、1980 年の戦塵けむる時から遺跡の保護活動を手伝ってきた。ポルポト時代にはかつての私の同僚であった 30 数名のカンボジア人保存官が行方不明となり、保存修復活動はゼロからの出発であった。鎮魂のために人材養成が始まった。1992 年に王立芸術大学の考古・建築両学部が再開された。調査団は 1996 年に第 1 回と第 2 回の同大学卒業生の中から 10 名を選び、世界に通用する一人前の保存官を養成するため中堅幹部養成プロジェクトを始めたのであった。そのため人材養成の拠点として現地に上智大学アンコール研修所(Sophia Training and Cultural Center)を建立し(1996 年)、そこで 3 年間考古・建築の研修を受けた後日本に来て学位を取らせるプロジェクトで、現在 8 名の中堅幹部候補が来日している。調査団の文化協力の哲学は、「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」である。



パンテアイ・クデイ遺跡発掘参加者

2001年3月1日～26日

団長: 石澤良昭 (上智大学・教授)
考古班代表: 中尾芳治 (帝塚山学院大学・教授)
考古班責任者: 上野邦一 (奈良女子大学・教授)
宮本康治 (大阪市文化財協会・調査員)
丸井雅子 (上智大学・共同研究員)
荒樋久雄 (上智大学・共同研究員)
カンボジア人研修生: Som Visoth (現在:神奈川県海外研修員)
Tin Tina (現在:上智大学大学院研究生)
Nuon Mony (現在:徳島県海外研修員)

2001年8月1日～10月7日

団長: 石澤良昭(上智大学・教授)
考古班代表: 中尾芳治(帝塚山学院大学・教授)
考古班責任者: 上野邦一(奈良女子大学・教授)
菱田哲郎(京都府立大学・教授)
宮本康治(大阪市文化財協会・調査員)
丸井雅子(上智大学・共同研究員)
荒樋久雄(上智大学・共同研究員)
カンボジア人研修生: Tin Tina (現在:上智大学大学院研修生)
Keo Kinal (現在:東京芸術大学大学院文化財研究科)
Sok Kimsan (現在:上智大学アンコーール研修所研修生)
Khut Sokhan
Sok Keo Sovannara
Song Sophy
Prak Sinath
Em Sopcheata
Khun Sathal
Nhean Socheat

<参考資料>

広報関係の記事・放送・発表および仮報告(2001年)

- 1) 廃仏 103 体発掘、地中から初めての大量仏像発見の件
 - ①読売新聞 3 月 25 日朝刊
 - ②朝日新聞 5 月 11 日朝刊
 - ③NHK 視点論点 4 月 17 日放送

- 2) 廃仏 103 体発掘の件でアプサラ総裁 Vann Molyvann 閣下に写真添付で緊急報告(3 月 20 日、プノンペン)
- 3) 廃仏 103 体の件でカンボジア国王シハヌーク・ヴァルマン陛下および閣僚評議会大臣(12 名)へ報告書(カンボジア語)提出(4 月 25 日付)
- 4) 103 体の廃仏発掘の件で松浦ユネスコ事務局長へ緊急報告(5 月 21 日、パリ)
- 5) 274 体の廃仏・千体仏石柱の件
 - ①朝日新聞 8 月 25 日朝刊
 - ②読売新聞 8 月 25 日朝刊
 - ③週刊朝日 10 月 26 日号
 - ④中央公論 11 月号、その他各誌に写真掲載
 - ⑤NHK ニュース 8 月 25 日放送
 - ⑥NHK 視点論点 10 月 17 日放送
- 6) 103 体の廃仏と千体仏の件で UNESCO・ICOMOS International Congress にて報告(9 月 10 日～12 日、パリ・ユネスコ会議場)
- 7) 103 体廃仏発掘・171 体廃仏および千体仏石柱の発掘の件で日仏国際シンポジウムにて発表(10 月 19 日、パリ・ルーブル美術館)
- 8) カンボジアにおける人材養成プロジェクトおよび調査団活動について NHK「プロジェクト X」11 月 20 日放送
- 9) 廃仏 274 体と千体仏石柱発掘の件で日本クメール学研究会にて緊急報告(10 月 15 日、上智大学)
- 10) 朝日新聞 11 月 20 日夕刊(文化欄)にて「アンコール遺跡群で大量の廃仏発見」記事掲載
- 11) 東南アジア史学会第 66 回研究大会にて記念講演「アンコール王朝の新局面」の題で 274 体廃仏と千体仏石柱の件を発表(12 月 1 日、別府大学)
- 12) 274 体廃仏と千体仏石柱の件でカンボジア国王シハヌーク・ヴァルマン陛下および閣僚評議会大臣(12 名)へ報告書(カンボジア語)提出(12 月 15 日付)
- 13) 274 体廃仏と千体仏石柱の件で ICC(アンコール遺跡調整会議:12 月 19 日～20 日、シエムリアップ)へ報告書(フランス語)提出(12 月 15 日付)